

## 福島県立医科大学病院及び連携した市中病院の抗MRSA薬の使用状況と解析

<sup>1</sup>福島県立医科大学 感染制御医学講座、<sup>2</sup>福島県立医科大学病院 検査部

○金光 敬二<sup>1</sup>、山本 夏男<sup>1</sup>、大橋 一孝<sup>2</sup>、大花 昇<sup>2</sup>

【目的】地域における感染防止対策を充実させ、院内感染対策に関する取組を推進するため、平成24年度に新たな診療報酬体系が示された。この中で、共同カンファランス開催と相互評価という施設間連携に関する要件が新設された。抗MRSA薬に関する相互評価のチェック項目には「使用に関する監視・指導、使用状況の把握」があげられている。今回、施設間連携を開始するにあたり、使用量データの比較における注意点を検討するため、当院および近隣の市中病院における抗MRSA薬の使用状況を調査した。【方法】福島医科大学病院での平成21年度から23年度までの抗MRSA薬4剤（バンコマイシン塩酸塩：VCM、テイコプラニン：TEIC、アルベカシン硫酸塩：ABK、リネゾリド：LZD）の使用状況を抗菌薬使用密度（AUD：DDD<sub>s</sub>/1000 bed days）により、年度別、診療科別に調査した。また当院と地域で連携する5つの市中病院における、抗MRSA薬の使用状況についてのデータも同時に解析した。【結果】抗MRSA薬の使用頻度（%AUD）は、平成21年度、22年度、23年度それぞれにVCM：60%、62%、48% TEIC：13%、14%、16% ABK：14%、3%、12% LZD：13%、21%、24%であった。抗MRSA薬の診療科別使用量（AUD）では、血液内科：2.5 整形外科：1.5 小児科：0.8 心臓血管外科：0.7 呼吸器内科：0.4の順に多かった。血液内科ではVCMが78%を、整形外科ではLZDが63%を占めていた。市中病院の使用状況は、病院毎に多様な特徴が認められた。【結論】抗MRSA薬4剤は適応症、移行性等に特徴があり、これに応じた診療科特有の指向性が認められた。今回の解析で、1. 診療科別、2. 病院別の使用傾向があることが明らかとなった。今後地域ネットワークの場などで使用量、使用状況を施設間で比較するには、数値のみの比較とならないよう、連携各施設と使用規範の背景や理由などに関する協議を行い、テーマを持って検討を進めていくことが必要と考えた。

## 横浜市立市民病院におけるダプトマイシンの使用状況

<sup>1</sup>横浜市立市民病院 薬剤部

○佐藤 歩<sup>1</sup>、五十嵐 文<sup>1</sup>、五十嵐 俊<sup>1</sup>、高尾 良洋<sup>1</sup>

### 【目的】

ダプトマイシン（以下DAP）は、新しい作用機序を持つ抗MRSA薬として2011年7月に承認され、難治するMRSA感染症治療における選択肢として期待されている。しかし、海外においては既にDAP耐性株出現の報告もあり、今後の適正使用が求められる。今回我々は、今後のDAP適正使用を推進することを目的に、当院におけるDAPの使用状況について調査を行った。

### 【方法】

調査期間は、当院採用後の2011年11月から2012年6月で、期間内にDAPが使用された症例について、投与目的・検出菌等の背景についてレトロスペクティブに調査した。

### 【結果・考察】

期間中DAPが投与された症例はのべ16例、男性11例（重複1例含む）・女性5例（重複2例含む）、平均年齢59.7歳（23～87歳）であった。投与目的としては、菌血症（疑い含む）が7例、皮膚・軟部組織感染症が6例、縦隔膿瘍疑い・発熱性好中球減少症・骨髄炎がそれぞれ1例ずつであった。投与開始時に起因菌が同定されていた症例は7例（MRSA5例・MRE1例・MRCNS1例）であり、うち6例がVCMのMIC=2を示した症例であった。投与期間の中央値は4日（1日～27日）であり、3日以内で投与終了となった症例が約半数を占めた。全例で定期的なCK測定が実施されていたが、問題となるCKの上昇は認められなかった。

### 【考察】

近年問題となっているVCM低感受性菌が懸念される症例に対して、DAPが選択されていた。短期間で投与終了となる症例が多くを占めたが、これは腎障害や血小板減少等、他の抗MRSA薬で問題となる副作用のリスクの少ないDAPがエンピリックな治療として選択されているためと思われる。当日は、投与開始時及び終了時の検査データについて追加調査を行い、考察を加える。